

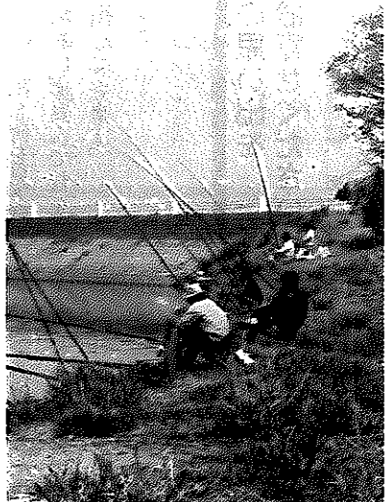


信濃川で 釣りを楽しんでます

小山 登さん (白井・五十九歳・自営業)

昨年まで、暇さえあれば登山を楽しんでいたのが、突然の病気でドクターストップ。釣りに転向しました。海釣り、溪流釣り、アユ釣りは、健康上の理由でとても無理。しかし、隣には「日本一の長江信濃川」が流れています。何がいるか、どんな大物がいるか、ロマンがあるじゃありませんか。聞いたところでは、あまり釣れないし、ファンも少なく、釣

釣果も上がってきました。先日など、四十センチ五十センチの大物を、近所のK君の見ている前で、残念ながら逃がしました。きれいな空気を吸い、日本一



の信濃川に釣りざおを出す。ストレス解消、健康増進。ほんとうに楽しいですよ。皆さんもいかがですか。

市民談話室



故郷鹿兒島を離れて 嫁いでからの思い出

近藤久子さん (戸頭・四十一歳・農家)

私がふるさと鹿兒島を離れてから、早いもので二十年の月日が過ぎました。鹿兒島と新潟では、言葉をはじめ、生活習慣や気候など異なる点が多く、人には言えない苦労をしてきたと思います。気軽に実家に帰れる人が、ほんとうにうらやましいと思いました。私が嫁いできたばかりのころは実家へ帰るのに二日かかりでし

た。それでも帰りたいもの。何かと気がかりですが、もう八年も帰っていません。新潟に来ていちばん驚いたのは、真つ白な雪でした。鹿兒島で雪が降るのは数年に一度あるかなしかです。そして驚いたものは大きな大きな田んぼでした。やっていけるだろうか、どうしよう、と心

配ばかりしていました。むこうには、こんなに大きな田んぼはありません。それでも、田植えや畑仕事などは、子どものころ手伝っていたので、手早くできました。いつのまにか、鹿兒島に住んでいた年月よりも、白根での年月のほうが長くなってしまいました。白根はお祭りやスポーツの盛んなところだと思っています。これからは、皆さんといろいろな思い出をつくり、そしてまた子どもたちにも、たくさん思い出をつくってやりたいと思います。



家族旅行

西村礼子さん (鍋湯・三十八歳・主婦)

子どもが二人とも高校生になり、あまり出かけなくなりまして、上の子が中学二年になるまで、毎年出かけていました。最近では、筑波博へ出かけたのが思い出です。車で行き、車で泊まり、朝早くからゲートの開くのを二時間も並んで待っていたのを思い出します。ゲートが開くと同時に、みんなが目的の場所に走り、また、暑い中を並ばなくてはなりません。

また、テントを借りて、キャンプも何回か経験しました。薪を集めたり、野菜を切ったり、子どもたちも一生懸命手伝ってくれたのを、アルパムを見ながら、懐かしく思い出します。その子どもたちも、今では私の横に立つと、私の方が見上げなければならなくなりました。子どもたちは親から離れたいのでしょうが、親の私の方が、子離れできなくて困っています。

懐かしい思い出

皆さんの便りをお待ちしています

市民談話室

「この一年」「夢」「友を語る」「市政に望むこと」

市民談話室のコーナーでは、皆さんの声を募集しています。気軽に投稿してください。この外、何でもけっこうです。皆さんの周りで起こった出来事、ふだん考えていること、広報に対する意見、要望など、どしどしお寄せください。原稿の長さは400字から500字程度としますが、紙面の都合上、文を短くすることがあります。また、文章を書くのはちょっと苦手という人は、電話でどうぞ。いずれの場合も、住所・氏名・電話番号をお忘れなく。あて先は〒950-12 白根市大字白根1235 白根市役所 企画調整課 広報広聴係 ☎373・2111 (300)です。

関心もないのにお世辞並べたて
妥協かも知れぬ尻尾を振って見せ
冷え冷えとした減反の冬景色
正座した膝をジョークで笑わせる
愛嬌を零して妻の脂肪過多
座布団もペアーでわかる新世帯
見栄を張る胸に高価なペンダント

山岡 フミ
吉川 彰
米野 光雄
今井 七郎
織田 セツ
後藤マサノ
佐藤トミノ

市民文芸

俳句

無人駅コスモス一鉢客を待つ 玉木 長吉
色あせし落葉に白き霞かな 渡辺 勤
短歌
枯葉舞う夕暮れ近き垣根外 中村 東
落葉たく火の赤々と見ゆ
川柳
ときめいた過去が語れる酒の席 佐藤 ヨキ
砂風呂に首だけ出して波を聴く 高橋祐四雄
ネクタイが戸惑っている若づくり 田中 成子
喜寿迎えそそろ自分史綴ろうか 田村 恒夫
ほずほずと日々好日を語り継ぐ 中村 尚治
道化師の涙三角帽でふく 西条 ムラ
朝食に欲ばりすぎたバイキング 早川 英男

陶芸で新しい分野を開拓 高橋裕雄さん

安田土原土を使って、窯変を起こさせ、粉引で紅色を出すことに成功し、それを「粉引紅彩」と名付けました。さらに、その歩留まりを高めることにも成功した高橋さんは、十月二十一日から四日間、初めての個展を新潟市で開きました。

の自動車勉強をして、陶芸のことなど忘れていたのですが、もともと美術好きの高橋さんは、時間を潰しては美術館へ通い、陶器に関心を持つようになり

と、いつそう傾斜していきました。昭和五十年、唐津・中里隆先生に師事し修業を重ね、五十五年から現在地で開窯しています。地元の土を使った陶器づくり

の土を使うことにしました。しかし、焼成温度が高く、収縮率が大きいため、苦勞の連続でした。「その苦勞が粉引紅彩を生む引き金になったのだと思います」と当時を振り返ります。「陶芸に縁があったのだと思います。今度の個展は粉引紅彩の出発点として開きました。今後は、中国陶磁の北方青磁や白磁にも本格的に取り組み、登り窯を作りたいと思います」と陶芸家の道を歩み続ける高橋さん。今後の活躍を期待しています。(大通一丁目・三十五歳)

